

揖斐川の付け替えで生まれた、川向いの『飛び地』

- 県・市町村界は、山地、河川、湖、海峡などの自然要因で分けられている場合が多く、揖斐川のような河川であれば、川の中心線が行政界となるケースが一般的です。

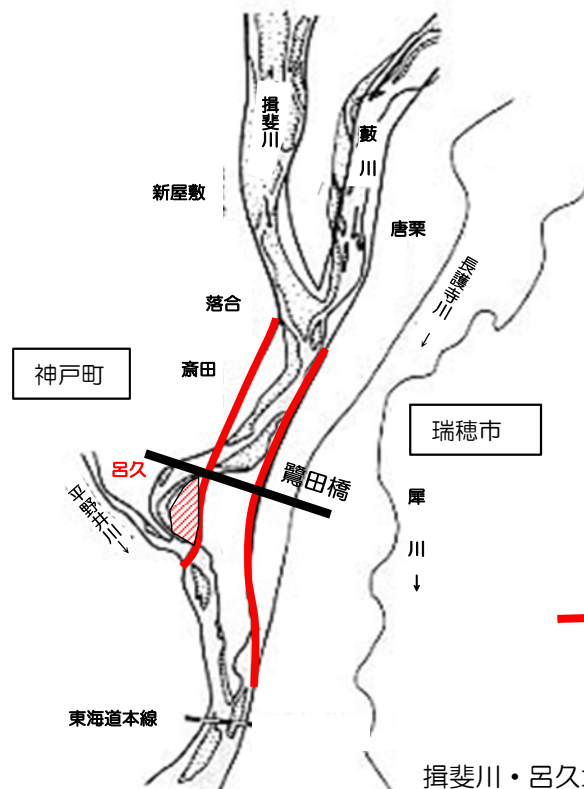
神戸町側に位置する揖斐川右岸堤防を車で走り、^{さぎたばし}鷺田橋（河口から45^{キロ}地点）の交差点で車を停車させ、^{みずほし ろく}ふと周囲を見渡すと、歩道橋に「瑞穂市呂久」と書かれています。なぜ、対岸の瑞穂市の地名が神戸町側に記載があるのでしょうか？

それは、昔の揖斐川の流れ（旧河道）が関係しています。古くは木曾川・長良川・揖斐川の木曾三川は網目状に繋がって流れ、大正時代に至るまで呂久地先（岐阜県瑞穂市）は、川幅が狭く湾曲もはなはだしく、その上堤防もなかったため、洪水により広大な区域が浸水被害を被っていました。これらの氾濫を防止するため、大正12年（1923）より始まった木曾川上流改修（大正改修）により、特に湾曲の激しい平野井川合流点付近の呂久川を廃川とし、新川1500mを開削することとしました。

この改修工事により、湾曲のはなはだしかった呂久川は直線化した揖斐川として生まれ変わりましたが、元の流れに沿っていた市町村の境が飛び地として残ってしまったのです。



揖斐川廃川埋立記念碑・
呂久新川付替記念碑



「呂久」の地名由来

- 昔の揖斐川の旧河道が、極端に西に曲流しており、そのありさまを轆轤（ろくろ）に見立てて地名としたと言われている。

— 木曾川上流改修による築堤箇所

揖斐川・呂久地先の工事概要

「木曾三川治水 百年のあゆみ」を参考として作図